

# 京都寺戸大塚出土の三角縁仏獣鏡

－道仏混糅の痕跡を追う－

近藤 喬 一

## ☐人騎白象

鏡の生る樹と仏の像

有翼獣と胡人

鏡と仏の像

魂瓶と仏像

三角縁神獣鏡の仏像

鏡は魏鏡か

**仏像であることの約束ごと** 寺戸大塚を発掘<sup>1</sup>してから長い年月がたった。正式の報告書を出版できていないので申しわけないが三角縁仏獣鏡について少し整理しておきたい。仏像の歴史の中に鏡をとりあげたのは水野清一氏が早い。「はじめの仏像は金銅像であつたらしい。…三十二相八十種好ということも早くから言われているが、古い仏像にあらわれるものは肉髻ぐらい。はじめは未熟から幼稚なもの。三角縁仏獣鏡の仏像が示すように非常に神仙像的であつた。けれども結跏趺坐で、蓮座に坐し、僧衣をまとい禪定印を結ぶように、また仏像の約束を守っている」<sup>2</sup>という。三角縁複像式四神四獣鏡の神像<sup>3</sup>で水野氏のいう仏像としての約束ごとを守っているものはなさそうだ。これからとりあげるのは水野氏のいう最低限の約束ごとを守っている像についてだけであることを最初におことわりしておきたい。

## ☐人騎白象

中国への仏教の東伝を考古学的に検証しようとしたのは兪偉超氏<sup>4</sup>がまずあげられる。いくつかとりあげられた例証のうち和林格爾の壁画墓、山東沂南画像石墓、江蘇連雲港の摩崖仏について関係するところだけ触れておきたい。1971年11月6日内蒙古自治区博物館の李作智と荷雲は和林格爾小板申M1号墓内に入り多くの壁画を発見したが、写真をとるすべがなかった。李作智は1973年8月2日記憶にもとづき記録を補充した。前室頂部には青龍、白虎、玄武、東王公、西王母と舎利の図像があつたという。1973年夏に調査した時には前室頂部南壁西側には、紅色の衣服を着た仏か菩薩の一尊が白象に騎っており、右上に「☐人騎白象」の傍題があつた。左には立鳳の像

があり頸下に「鳳皇従九韶」と東側には朱雀像が残り、「朱爵」と傍題が墨書されていた。北壁頂部には「麒麟」、「雨師駕三圃」の墨書傍題と2個の図像があり東西両壁頂部の壁画は剥落して何もなかった。

墓主は西河長史、行上郡属国都尉、使持節護烏桓校尉を歴任した人物、比二千石クラスという。後に出版された報告書<sup>5</sup>ではこれらの図像や傍題は一部を除いてほとんど残っていない。兪偉超氏の解説によると東漢代、西域の竺大力らの訳『修行本起経』卷上「菩薩降身品第二」に“是に能仁菩薩（東漢では‘釈迦牟尼’をあるいは‘能仁’と訳した。釈迦のなお修行が成っていない仏の時を‘菩薩’と称する）化して白象に乗り、来たりて母胎に就く。四月八日……夢に空中に白象に乗る有るを見る。光明悉く天下を照らす…。王が夢を占わせたとこ“この夢は王の福慶、聖神が降胎した故にこの夢を見た。生れた子が家におれば転輪飛行皇帝たるべし、出家し道を学べばまさに仏たり得、十方を済度せん”と。王歎喜す。なお修行してはまだ仏に成らざる各種の仏徒をとらえて“仙人”と呼ぶことは漢訳仏典中、枚挙にいとまがない程多い。‘仙人’はもと道教の用語である。訳経事業を開始したはじめの時、仏教はまだ早期道教の附庸的位置を占めていたが、道教のなかの呼び習わしたい方を借用するのは自然なことだった。すると「仙人騎白象」という傍題をもつ南の神は釈迦生誕縁起を描いたものであり、北の舍利は釈尊入滅といういづれも仏教の一大事因縁を内包するものといえよう。

戦国時代に成立したとされる四神の思想は、東西に東王公と西王母としてがっちり存続しつづけるが、東漢晩期には和林格爾小板申M1号墓のように釈迦像を直接表現しないにしても、釈迦の存在を暗示する図像表現が道教の尊重する伯牙や黄帝といった神像から交替して南北の方角神とともに登場してきたことになる。和林格爾の壁画墓は壁画面の剥落が甚しく後になって確認できない図像や傍題が多いためか、これを認めない研究者や態度を保留する人もいるようである。

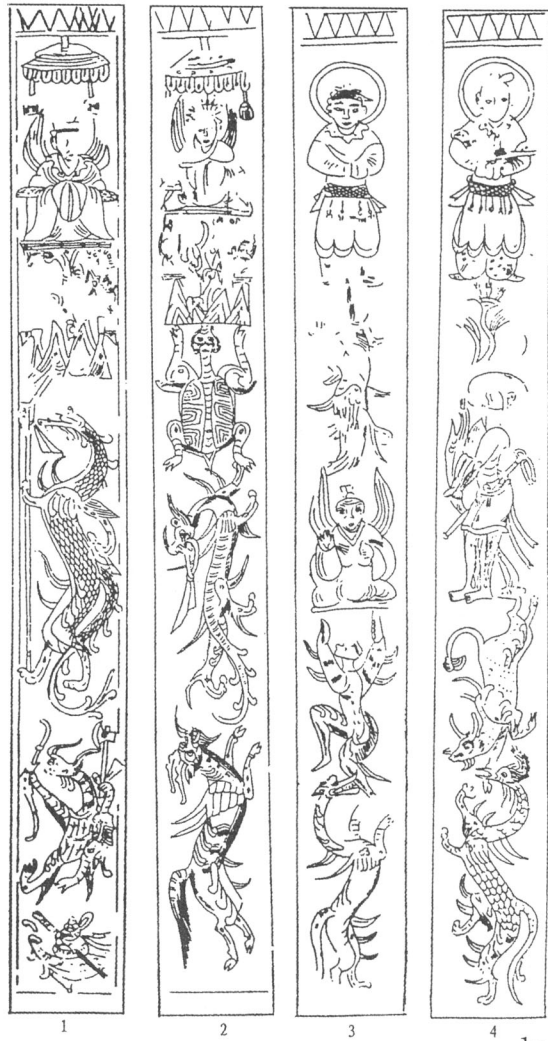
#### 山東省沂南画像石墓<sup>6</sup>（図1a）

沂南北寨村の地元で將軍塚と呼ばれていた場所が1954年春に調査され画像石墓が明らかになった。報告書は出版されたが遺構は埋めもどされて詳細は報告いがいよくわからなかった。1994年9月から2ヶ月山東大学に滞在していた私は冬直前帰国するまぎわの日数をさいて、山東省文物局と山東省文物考古研究所の御好意で研究所の呉文祺氏の案内を得、再び発掘され画像の拓本作成中の現場を見学させていただいた。京都大学人文科学研究所で林巳奈夫氏を班長とする「漢代文物の研究」班でとりあげられた最初の画像石墓が沂南であったので非常に興味深かった。前室西間の藻井は蓮華文が彫出されている。林さんによれば天を意味する。

中室中央の八角形擎天柱には八面のどの部分にも上から下へ像が彫られている。東面と西面には東王父と西王母がそれぞれ最上層には刻まれており、南北両面の最上層には円光背（頭光）かと思われるものを負った童子風の人物がそれぞれ両手に魚や鳥を捧げもった姿が彫られている。衣服は中国のものとは異なるものを身につけフリルのついた裾飾りや腰飾りも胡風の趣がある。

李正曉<sup>7</sup>氏は足首の上でふくらみのある褲(ズボン)をしぼり、軽みのある先のそったバックスキン風の靴をはいたスタイルとアフガニスタンのカブール博物館に展示されているアショカ王の褲と靴とを比べ両者のよく似ていることを示している。問題は南面の上から3人目の人物である。両肩から羽翼が生え端坐している。高髻であり(報告書では触れていない)右手は挙げて胸前に置き手の掌は外に向け五指を開く。仏像のとり施無畏印相にとても良く似ている。左手は胸前に置き物を持っているような状態である。北面にも最上層に一童子を刻む。双手で一鳥を捧げている。

原報告者は18幅の飛天羽人像、56幅の手印を作り両肩から双翼の生えている神仙、56幅・57幅の頭上に円光をもつ童子などは一応仏教美術の影響を受けたものだろうかとの認識はしているが、南北朝時代の仏像と比べれば両者は相当大きな隔りがあるとの見解を示している。楊泓は早くにこれらを仏像と認めた。俞偉超は三像を菩薩像だとした。林巳奈夫<sup>8</sup>は火神祝融と后土(南面)、玄冥(北面)に比定した。李正曉氏<sup>9</sup>によると任継愈は仏教の影響を受けた神童像と仙人像だとする。さらに温玉成<sup>10</sup>は南面の双翼坐像を老子とし北面の最上層の人物は弥勒菩薩だという。また北面最下層の鳥首翼龍は西域で最も崇拝されている神獣(グリフィン)ではないかと。ここでは南北両面最上層の人物に見られるのは頭円光背であること、南面の有翼神像は施無畏印相を示し、左手は衣をつまんでいるのではないかとこのことを確認し、それらが仏教思想に基づくものと判断しておきたい。俞偉超氏ががい



沂南画像石墓の东王公、西王母和立佛图  
1. 中室擎天柱东面画像 2. 中室擎天柱西面画像 3. 中室擎天柱南面画像 4. 中室擎天柱北面画像



1a 沂南画像石墓  
1b 孔望山摩崖像  
图1 魯南・蘇北の仏

われるように東西は道教の神が座を占め、南北には新しく中国へもたらされた仏像のイメージを道仏混糅の中で表現した像だと考える。沂南画像石墓の年代は李發林氏らの研究により東漢晩期に比定されている。土居淑子氏<sup>11</sup>は曹操の手中に山東地方がおちた192年以前、2C末～3C初の造墓だろうといわれる。

### 江蘇省連雲港市孔望山摩崖像（図1b）

黄海に面した孔望山南麓の最西端、東西長17、高8mの範囲に105個の造像が18組にわかれて存在している。1980年史樹青氏が像の中には仏教の内容と関係あるものを含んでいると最初に指摘した。ついで調査した俞偉超と信立祥氏は摩崖中のX<sub>68</sub>、X<sub>66</sub>、X<sub>1</sub>像とX<sub>2</sub> - X<sub>4</sub>号龕内の画像は漢代画像石中よく見る形像で、太平道の道教の造像だろうという。地元の博物館と中央美術学院や北京大学の合同調査のうち関係ありと思える像だけについてのべておきたい。

X<sub>2</sub> 丸い顔に大きな耳、落ちくぼんだ目と高い鼻、頭上には高肉髻、身にはまる<sup>えり</sup>領の長衣をまとい双手を胸前に置き右手の五指を開き掌を外に向けて施無畏印をなす。左手は衣を握っている。X<sub>3</sub>は深目高鼻、頭には後面に翅のある鋭頂冠をかぶる。顔は西をむき袖に手を入れあぐらをかいている。

X<sub>65</sub>は深目高鼻、頭には後面に翅のある鋭頂冠をかぶる。身は束帯を着、圓えり長衣である。右手には一朵三弁の蓮華をもっている。X<sub>76</sub>は高肉髻、手印はX<sub>2</sub>やX<sub>61</sub>と同じ右手は施無畏印、左手は衣をつまむ說法図、結跏趺坐である。X<sub>82</sub>の裸体で横たわるのは太子時代のシャカの捨身飼虎図だとの見解がある。さらに涅槃図もある。なおX<sub>88-92</sub>は一龕内に五像が刻まれているが中央のものがやや大きく高肉髻、円形頭光背をもつ。東側の二像にも円形頭光背が西の両像は光背が見られる。他に円彫の象や蟾蜍は略す。孔望山一帯は秦漢の時期、経済的に恵まれ（鉄官の置かれた地）文化の栄えた地であった。方士道術の盛行した地でもあり、それらの基礎の上に仏教も盛行したと報告は簡略にいう。

画像石に通暁した信立祥氏をともなった俞偉超氏は石を刻み雕りだす技術を検討しながら孔望山の摩崖造像がすべて東漢の桓靈の時期（147-189A.D.）のものであるとした。そのうちの4個の小龕（X<sub>88-92</sub>、X<sub>93-95</sub>、X<sub>96</sub>、X<sub>97-105</sub>、15組-18組まで）が最も晚いものであろうという。なお龕の中の像で北魏の仏像にみられる二仏并坐法による表現のものはみあたらない。

孔望山摩崖像は仏教をある程度理解した段階での造像である。桓帝の時、安息の安世高が經典の翻訳を洛陽へやって来て大規模に行った。時をおかず月支の人、支讖、支曜らが来、洛陽で訳業を継続した。当時貴霜（クシャーーン）王朝〔古代バクトリアを支配したサカ族系イラン種〕の盛期でカニシュカ王の時ガンダーラ芸術が咲きほこっている頃にあたる。『後漢書』卷四十二光武十王列伝第三十二に光武帝の十一人の子供のうち許美人の産んだ英は建武十五年（39A.D.）楚公に封じられ十七年（41A.D.）楚王（彭城を都とする）となった。若い頃は游俠を好み多くの賓客とつきあいがあったが、晩節には黄老を喜び、学んで浮屠<sup>ぶく</sup>を為り齊戒して祭祀した。事があった

時その応接に感じた宰相は「楚王は黄老の微言を誦し、浮屠の仁祠ととおを尚たもび黎齊すること三月、神と誓をなしています。何の疑うことありましようか」と皇帝に報じた。明帝永平十四年（71A.D.）英は自殺し、立ちて三十三年、国除かるとある。『後漢書』楚王英伝の注にひく袁宏の『漢記』に「浮屠は仏なり。西域天竺国に仏道あり。仏とは漢の言う覺なり。覺悟を以って羣生ひきを將ひきいるなり。その教は修善、慈心を以って主と為し、殺生せず専ら清静に務む。その精なる物を沙門と為す。沙門とは漢の息を言うなり。けだし息の意は欲を去り無為に歸すなり、又人の死するや精神は不滅、復に隨い形を受く、生時、善惡みな応報あり。故に行を貴び修道を善くし、以って精神を鍊じ以って無生に至り而して仏たり得るなり。仏の長丈六尺、黄金色、項中に日月の光を佩す。變化無方入らざる所無し、而して大いに羣生を濟たすく。初め明帝夢に金人の長大なるを見る。項うなじに日月の光あり、以って羣臣に問う。或は曰く「西方に神あり、その名を仏と曰う。陛下の夢みし所、是れ無きを得んや、ここに使を天竺に遣わしその道術を問ひ而してその形像を図せしめんか。」

『後漢書』卷七孝桓帝紀第七に延熹二年（159A.D.）天竺国來獻、四年（161A.D.）冬十月天竺国來獻、八年（165A.D.）春正月、中常侍左館わんを遣わし苦県くけんへ之これかきしめ老子を祠らしむ。[十一月]中常侍管霸をして苦県くけんへ之これかきしめ老子を祠らしむ。九年（166A.D.）秋七月庚午、黄老を濯龍宮に祠る。桓帝は年三十六で永康元年（167A.D.）崩じた。論に帝は音楽を好み琴笙を善くした。濯龍宮くわくりゆうに之これき祭りし、華蓋を設けて浮図、老子を祠った。このようにすることを神に聽くといったとある。

『後漢書』卷三十下、郎顛・襄楷列伝に襄楷、平原鬲陰人也。学を好み古ひろに博し。天文陰陽之術を善くす。延熹九年（166A.D.）[桓帝に]上疏して曰く「又聞く宮中に黄老、浮屠之祠を立つると。此の道は清虚にして無為を貴び尚ぶ、生を好み殺を惡にくむ、慾を省はぶき奢しやを去る。今陛下欲するを嗜たしなみて去らず、殺罰は理を過ぐ、既に其道を乖ことわりしに豈たがえにその祚あを獲んや！或は言う老子は夷狄に入りて浮屠を為る。浮屠は桑下に三宿せず、久しく恩愛に生きるを欲せず、精の至なり。天神遣つかすに好女を以ってす、浮屠曰く「此れただ革囊ながしめに血を盛れるのみ。」遂に之これに眇ながしめせず。其の守たるや一かに此くかの如し、乃ち能く道を成す。今陛下姪女、豔婦天下の麗を極めり。甘肥飲美、天下の味つくを單す。なんぞ黄老の如きを欲せんや。」

どんな宗教芸術も内容とテーマについては人々の理解の程度による。東呉の最後の皇帝孫皓（264-280A.D.）は衛兵が後宮の園中で得た「一立金像」を厠せうに置き四月八日に灌仏と称しておしっこをかけ群臣と笑いふざけた。おちんちんがはれあがり苦しみぬき、像を洗い焼香懺悔するとやっと癒った。<sup>12</sup>当時の東呉の支配階級の仏教に対する認識程度を示しているものかどうかは後に検討する。經典の翻訳事業が本格化して以後ようやく仏像も仏像らしくなるといえる。兪偉超氏によると「孔望山摩崖像で注意されるのは彫られている像の多くが頭に先の尖とががった翅の垂れた帽子をかぶり、深目高鼻（眼窩の凹んだ高い鼻）の胡人の形象であること。山東画像石に多い

「胡漢戦争図」と呼び習わされているものに登場する胡人ときわめてよく似ていることである。」

明帝の頃に確かかどうかは別にして、桓帝靈帝の代になると仏教が中国へ伝えられたのは確かであろうが、漢人が仏教信者になることは少なく仏教を信仰していたのは胡人—西域を旅して中国へ商売その他で流入してくる—であり仏教は胡教と呼ばれ、仏は胡神といわれた。東漢よりもっと後の時代、鮮卑拓跋氏の興した北魏王国の三代目太武帝の漢人顧問ともいうべき立場にあった崔浩は「漢—シナ教養人の誇りにかけて仏教を嫌忌した。…仏教嫌悪の理由はそれが‘胡神’化外の異国の野蛮な神だということにあった。雲崗の石窟寺院に刻まれた仏像群は「胡神」「胡妖鬼」の偶像にほかならない。彼のうちには仏教に対抗しそれを凌駕する絶対的な文化として儒教の伝統があったという。<sup>13</sup> 後に仏教弾圧の契機となった。孔望山摩崖造像に表現されているのは胡神であったといえる。

一方道教とこの地方の関係はどうであったか。先にあげた襄楷の伝に「順帝の時（126—144A. D.）、琅邪の宮崇が闕に詣り、その師の干吉が曲陽泉の水上<sup>ほとり</sup>で得た所の神書百七十卷を上せた。…號して‘太平清領書’という。其の言うところ陰陽五行を以て家となす、而して多くは巫覡の雑語なり。有司奏するに崇の上<sup>のほ</sup>すところ妖妄にして經たらず、乃ち之<sup>これ</sup>を収蔵す。後、張角頗るその書を有するなり。」とある。曲陽は東海にあり連雲港市にあたるという。そこから道教の一派、太平道の理論的な書物—太平清領書が出現し、それを太平道教を興した張角がたびたび読んでいたということは、この地域に道教の思想が早くからしみこんでいたことを表していることであろう。仏教は中国へ伝入した当初、道教の言葉、姿を借りて人々の中へ入ろうとした。孔望山摩崖は道仏混糅の造像というのもむべなるかなというべきか。

以上内蒙和林格爾の壁画墓、山東沂南画像石墓、江蘇連雲港摩崖像について中国へ伝来した初期の仏像の考古学的なあり様をのべた。黄河周縁というか華北というべきかの初期の仏像の状況は主要なところと考える。いずれも時期は東漢の桓靈の頃に相当し、作成された像は道教と仏教の神格が混糅した様相を示しているといえよう。つぎにもう一方の初期仏教の状況を示す長江流域の状況をながめてみよう。上流の四川、中流の湖北・湖南、下流の浙江・江蘇を中心とする地域でのあり様である。

## 銭の生る樹と仏の像

北京大学の宿白氏<sup>14</sup>は南京博物院と日本の龍谷大学が共同研究の成果を発表した『仏教初伝南方之路』<sup>15</sup>を利用し長江流域の初期の仏像について論じられた。氏の論の中で最も興味深い点は仏像と胡人の関係を強調したことである。胡人のことは先にあげた兪偉超氏も指摘しており、四川のことだけではあるが呉焯氏<sup>16</sup>が力をいれて論じている。いずれにしろ宿白氏は兪偉超氏とちがって初期の仏教は中国内陸に移住した胡人の崇拜するところであって、漢人自身にはそれほど広く深く浸透したものではなかったという。

それはさておき南方で最も早く仏像が知られているのは四川を中心とする東漢から蜀漢にかけての墓葬中からである。四川樂山麻浩M1崖墓、四川樂山柿子湾M1崖墓の後室門上方や門楣上から発見された仏像（図2 a）は高肉髻、頭円光背、通肩衣を着、右手は施無畏印を左手は衣の端を握った高浮雕の坐像である。この像と同じ姿をとるものが崖墓や塼室墓、石室墓内から発見される搖錢樹の樹頂または樹幹に鑄出されている。あるいは樹座に表現されている。少し立ちいつて検討してみよう。

崖墓<sup>17</sup>は西漢末王莽期に出現し東漢晩期に発展、三国、西晋、六朝時代まで続く四川の代表的な墓葬である。他に塼室墓や石室墓も見うけられるが、景観と地質学的な特殊性に規定されたのか崖墓が発達した。副葬品の中で搖錢樹<sup>18</sup>は四川では東漢中期にあらわれ[雲南昭通の石質樹座には東漢建初九年（84A.D.）の銘があり、雲南保山の磚室墓は延熙十六年（253A.D.）の紀年がある]晩期に発達した。何志国氏<sup>19</sup>によると2010年までに189例発見されている。完形に近いものは10余例、鍍金のは5例という。四川簡陽県鬼頭山東漢崖墓<sup>20</sup>中の画像石棺の傍題では‘柱錢’と名づけられている。分布はS.N.Erickson<sup>21</sup>の調べた時には四川（53）を中心にして雲南（2）、貴州（7）、陝西（5）、青海（2）に及んでいたが近年では甘肅武威、寧夏固原<sup>22</sup>で出土したり、錢樹の出土はなく台座だけが四川重慶涪陵三堆子東漢墓<sup>23</sup>出土のものと同じようなものが湖北黃岡市対面墩東漢墓<sup>24</sup>からも発見されている。

漢代に行われた道教は先に触れた張角の興した河南を中心とする太平道と蜀に客として入った張陵の土着宗教と混じった道教一天師道とがあった。天師道はまた巫祝のまじないで病が癒えた場合は米を五斗奉納するということから五斗米道とも呼ばれ、時には米賊とも呼ばれた。五斗米道は四川で圧倒的人気を誇り崖墓の被葬者の中にはその信者がかなりいたのではなかろうか。何志国氏によれば墓主の身分は189件中4件だけ明確だという。県令1、大姓蔡氏一族1、平民2となる。羅二虎氏によると崖墓の被葬者は漢人だという。また墓室内に石臼などがあり墓を利用して五斗米道の指導者か信徒が丹を練ったものかとの見解も聞かれる。紀元前後ネロの弾圧を逃れてローマの地下墳墓（カタコム）に隠れた初期のキリスト教徒を思いおこさせる。

錢樹は陶製または石製の台座に青銅製の樹幹を立て環に鍵型のフックをつけた青銅製の枝をはめこむ形をとっている。樹葉は左右同じ高さの広漢出土のものなどでは形・文様は左右対称になっているように見える。葉の茂った枝の下方には五銖錢を形どった錢がたくさん生り、上方の葉の上には西王母、東王公、白牙彈琴などの神仙また伝説上の人物、神獸などの動物が影絵のように巧みに表現されている。切り絵技法による影絵とでも呼ぶべきであろうか。四川の地、蜀には蜀郡と広漢郡に漢代中央工官尚方の支配下の工官が置かれていた。錢樹に製作者の銘のあることを聞かぬが、その技法の「広漢西蜀尚方…」銘をもつ元興元年（105A.D.）以後の獸首鏡や夔鳳鏡の文様に共通する感のあること、あるいは同年鄧皇太后（105-121A.D.）によって蜀の工官の漆器製造品の後宮への納入停止<sup>25</sup>の結果、その関係者の技術が反映しているのではないかと考える。

搖錢樹の図柄の一つが道教信仰にとって最も大事な神格であった西王母である。樹座と樹頂、時に樹枝上に表現されている。その西王母にとってかわるよう現われるのが仏像である。西王母と仏像とそれぞれ代表的なものをあげてみた。

#### 樹頂の西王母

① 四川涼山西昌高草(図2b)<sup>26</sup> 1976年冬博室墓より発見された。東漢中晩期か。龍虎座に坐す西王母とその下で不死の仙薬を搗く玉兔と靈蟾が左右に侍る。龍虎はともに脚のつけねは翼風の表現。

② 四川茂汶<sup>27</sup> 壁の上の龍虎座に坐す西王母。その下で仙薬を搗く玉兔と靈蟾。左右に双層重檐闕。その上にはそれぞれ鳳鳥1。向って左、闕の外へ天坪棒に錢をさげて運びだす人物。向って右外側にも同じような人物。西王母の頭上には孔雀か。天門の銘をもつ重慶巫山県漢墓出土の鍍金銅牌と構成が似かよう。

③ 四川綿陽何家山M2崖墓<sup>28</sup> 頭上に壁を戴く西王母。龍虎座に拱手して坐す。頭に勝、肩から翼が生える。他に④成都錢幣協会蔵品なども西王母の肩から生えた羽翼が円形風に頭上で接触しかかり円光背のようにも見える。

#### 樹枝上の西王母

① 四川涼山西昌M101号博室墓<sup>29</sup> 枝の上に傘蓋の下の龍虎座に西王母が坐す。博山炉を支える人と手足舞踏しながら羽毛をなびかせた羽人、その他神怪、兔首羽人、尾翅を展げた朱雀。

② 四川彭県雙江<sup>30</sup> 幹を中心に同じ高さのところ左右対称の文様をもつ樹枝が留められている。西王母とそのお付きのいる枝とは別に、三山冠をかぶる東王公のいる枝もある。三段式神仙鏡がい漢代四川の画像の中で東王公の存在がほとんどどこにも触れられていないが、注意深く見れば存在していることがわかれる。

#### 樹座の西王母

① 四川綿陽何家山M2<sup>31</sup> 2件のうち1件の片面下段全面に虎背の上に坐す西王母が浮彫されている。反対の面には1人が牽馬。上段には奔走する羊とその上に1人が騎坐、幹の筒形をかかえる。

② 四川宜賓山谷祠漢代崖墓<sup>32</sup> M3号墓の3件のうち1件の上段・下段のうち片側の下段中央に西王母。別面は1人と1頭の羊。上段は羊と羊に騎る人物1人。

③ 四川綿陽河辺東漢M2崖墓<sup>33</sup> 下段は手前左右に双層重檐闕。門のように接続した上に三足鳥と狗各1。後方は左右に単層の闕。上段は玉勝を戴く西王母が左龍右虎の方座上に坐す。

#### 樹頂の仏像

① 陝西城固東漢博室墓<sup>34</sup> 残高93.5cm。座は釉陶製品。仏像(図2c)は円光背を含めて高6.5、幅4.1cm。右手施無畏印、左手は衣端を握る、結跏趺坐。頭頂に肉髻、その下半分の頭は平行の縦線で表す。肉髻上の頭髮は半円同心円の形で表わす。額に白毫相、鼻下に上むきにはねた髭。頭

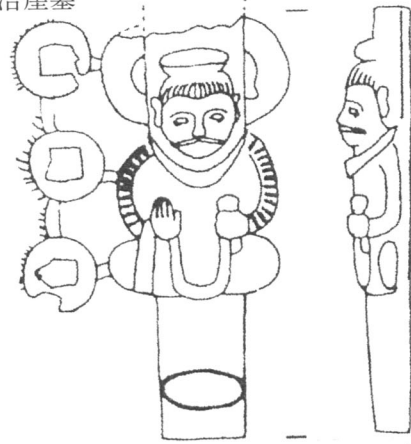




2b 西昌高草



2a 乐山麻浩崖墓



2d 钱树树干上的佛像 (绵阳何家山1号崖墓出土)



2c 钱树顶饰上的佛像 (陕西城固汉墓出土)



2e 钱树树座上的佛像 (彭山豆芽坊166号崖墓出土)

图2 四川の仏

光は二重の同心円で表現する。光背内に6個の小円圈、通肩衣。仏像の右に仏にむかって跪拝する人物。頭に異形の高冠をかぶり鼻下に胡髭あり。漢中地区は漢代益州刺史部、三国時期は漢中郡は蜀漢政権の統轄するところと羅二虎氏は書くが、実際は張陵のあとを襲った張魯の支配下にあった。バランスのとりのむつかしい三国時代、天師道の支配を握った張魯は漢中に独立し曹操も彼を鎮南將軍、閬中侯に拜しその子息たちも官職を得たことは『三国志』魏書卷八、二公孫陶四張伝第八に載る。

② 四川安県文管所蔵東漢仏像搖錢樹<sup>35</sup> 2000年5月綿陽市永興鎮に近い安県界牌鎮の崖墓中から出土。座は泥質紅陶。樹幹中央の節ごとに一尊、計五尊。樹頂の仏像は大肉髻、双眼微合、おもては豊満。円領衣をまとい右袒、左手は衣の角の下垂しているのを握り、再び右手にまわし中間はU字形に垂れている。右手は施無畏印。結跏趺坐。両側に小人が立つ。頭に尖頂帽。

#### 樹幹の仏<sup>36</sup>

- ① 四川安県文管所蔵錢樹 先に樹頂の仏をみた。それと同じような仏五尊
- ② 四川綿陽何家山M1崖墓 五尊 (図2 d)
- ③ 四川忠県塗井M5崖墓 五尊
- ④ 四川忠県塗井M14崖墓 八尊
- ⑤ 貴州清鎮M11石室墓 二尊

#### 樹座の仏

① 四川彭山夾江M166崖墓<sup>37</sup> 上段には仏(図2 e)と侍者、供養者の像、後二者は胡人と判断されている。下段には壁を中心にして龍虎のにらみあい。

以上数は少ないが残りの良い資料で西王母と仏の像を示した。西王母と仏がいついれかわるのか、また錢樹の役割は何なのか、その中で仏はなにを期待されたのかという疑問がある。第1の質問に対しては四川綿陽何家山M1崖墓とM2崖墓<sup>38</sup>がいつ頃かを示している。

M1崖墓は1989年11月工事中に発見された。高さ約50mの紅砂岩からなる小山で地表から約30mの高さのところにあった。前・後室を甬道でつなぎ前後に各2棺を置く。錢樹は前室左棺の後方、樹座は同じ棺の前方墓道に近い方にあった。紀年を示すものはないが、副葬された貨幣の中に剪輪五銖と縋環五銖があった。他に四乳鳥文鏡(D.10cm)1面と三段式神仙鏡(D.18.3cm)1面がある。後者は五斗米道と関連の深いことが最近主張されている。<sup>38</sup> 仏像は同型の五尊(長6.5cm)が錢樹の樹幹に上下の樹枝の中間の位置に鑄接されている。中国の研究者は右手施無畏印、左手は衣の裾をつまんでいるというが、林巴奈夫氏も持っている紐が垂れているので紐を孔に通した錢ではないかとの意見<sup>39</sup>であるが、工人の衣の表現が稚拙なだけではないか。いずれにしる錢樹の樹幹に仏の像が出現する。樹座は1人が奔鹿を駕している状態。

M2崖墓はM1より西へ6mのところ1990年2月工事中に発見された。墓道は破壊されていたが磚で封門されたまま。甬道につづく墓室は前後にわかれ2件の錢樹座は前段に副葬されていた。

いずれも泥質紅陶で山形。上段は雄獅子が首をもたげ口を大きく開けうずくまる。脇に二翅が生えている。獅子グリフィンと呼んで良いものではないか。背に幹を立てる円筒柱が立つ。下段は五馬の浮雕。もう一方の樹座は上段は1頭の羊が走りその上に騎坐する人物。下段は中央に虎背の上に坐す西王母の浮雕。別面は1人が馬を牽く。樹頂には龍虎座上に坐す西王母。どちらの座と組みになるのかは不明だがいずれにしても西王母だけで仏の姿は残っているものの中にはみあたらない。副葬された貨幣は西漢・東漢五銖と貨泉などの類。M1よりM2の方が少し古い。しいて年代づけるならM1は東漢末～蜀漢初に対し、M2は東漢晩期というところか。この1例で西王母に仏がとってかわるのはすべて東漢末～蜀漢初とはいきれないが目安にはなろう。

ところで錢樹にこめられた思いとは何であったのか。2m近くも台座を含めると高さのあるものが、副葬用の明器ではなくて墓主生前の愛用品であったという人もいる。樹座に多い羊は祥に通じ吉兆を示し、幹をさしこむ管をかかえて羊に騎坐する人物ともども背に乗せる有翼獣は錢樹の守護あるいは威嚇の意をこめているのだろう。五斗米道信徒の願う昇仙にとって丈高い錢樹は西王母の住まいする崑崙山にも通ずるものか樹頂に西王母が早い段階のものにはいた。樹枝と樹枝の間の樹幹にいくつも鑄接されている同型の仏像は、まるで樹幹をよじのぼって仏が樹頂にだどりつきそれまで錢樹を一人占めにしていた西王母にとってかわって頂上を占めたといった様子に見える。両者の構成はほとんどかわらない。いずれにしろ西王母と仏像は同じ役割を果すことが期待されていた。錢も仏も使うてこそなんぼという意味があるといった人がいたが入澤崇氏<sup>40</sup>が言うように仏に対し最初に求められたものは覚者としての仏ではなかった。現世利益を期待できる者としての仏であったと言えようか。西王母の傍に表現されている兔が不老不死の仙薬を搗くのに代表されるように、西王母のもつ仙薬さえ手にいれれば人は不老不死の命を得られるとイメージされていたのだろう。仏の役割もそれと同じようなことであったといえようか。福祿寿、昇仙、不老不死が願われていた。

長江流域の初期仏像の出現に関して宿白氏は四川での呉焯の見解を受け入れつつ江浙地帯の魂瓶（堆塑罐）に貼りつけの形で出現する仏の像とそれに関係する人物群を胡人と判断し、長江流域へ仏教というべきか仏像をとるべきかもちこんだのは胡人であることを強調した。『三国志』卷三十三蜀書後主伝第三の建興五年（227A.D.）の条に引く諸葛亮集に劉禪の三月に下した詔に曰く「涼州の諸国の王、各の月支、康居の胡侯、支富、康楨ら二十餘人詣りて節度を受く。大軍北出し便ち兵馬を率將と欲し戈を奮って先驅す…」とあるように蜀と西域のいくつかの侯国と軍事同盟を結び魏と闘おうとした。このようなことをきっかけに蜀には胡人の多数住みつくことがあったという。魏の明帝太和三年（229A.D.）十二月に大月氏国の波調が使を遣わして奉獻したこととこれに対する親魏大月氏王の金印紫綬を与えたことは先の蜀の動きに対する魏の外交成果だったという見解もある。その働きの中心は曹真で彼は文帝丕の時に鎮西將軍、仮節都督雍、涼州諸軍事に任じられていた。

とにかくここで注意しておきたいのは、四川の東漢中期から蜀漢期にかけて出現した崖墓の門楣石の上などに彫りだされた仏像も、崖墓の副葬品の搖錢樹に鑄出された仏像、錢樹座に浮彫りされた仏像もいずれも右手施無畏印、左手は衣の裾をつまみあげる動的說法図で、なかには稚拙なものを一部含みはするがだいたい一目みて仏の像とわかるということである。

なお、搖錢樹の問題を西王母と仏の関係にしぼったので他のことに触れるいとまはないが、錢樹座には多くの場合有翼獣が陶座に表現されていて、錢樹座と有翼獣、錢樹に表現された仏像と胡人の関係がオーバーラップして中国初期仏教の伝入が僧による経典の輸入ということも大きな要因であったことは間違いないが、胡人と商業につれだつて入ってきた仏教というのもあり得たのではなかろうか。その世界の背景に有翼獣のイメージされる世界が広がっていた。では少し横道にそれるかも知れないが胡人とはどういう人達かそこを少し明確にしておきたい。

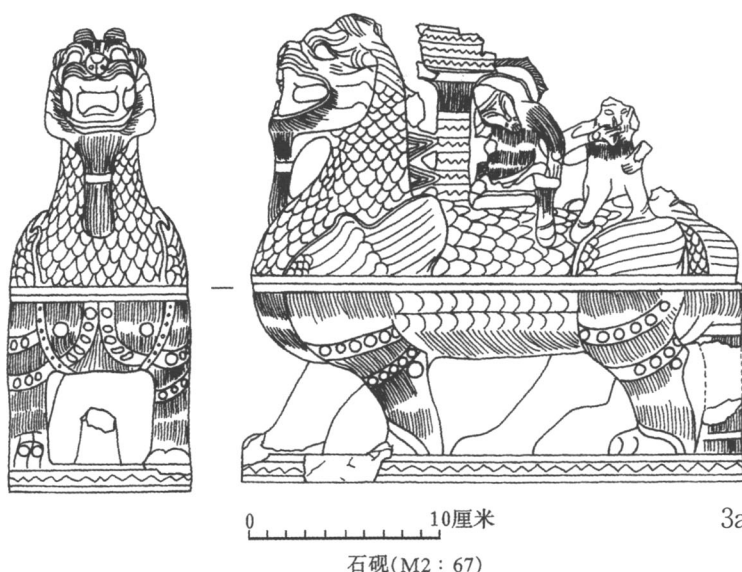
## 有翼獣と胡人

有翼獣の代表格たるグリフィンには鳥グリフィンと獅子グリフィンがあり、その起源地はイランとギリシャにある。両者はそれぞれオアシスルート、草原ルートともいべきものを通して少なくとも前五世紀にはミヌシンスク盆地に達していたと林俊雄氏<sup>41</sup>はいう。ミヌシンスクから中国へのルートはどうであったかはひとまずおいておいて、動物というか獣形にというべきか翼をもたせるのは孫華氏によれば三星堆の夔龍紋にもある<sup>42</sup>という。李零氏も中国の有翼神獣にははやくから興味をもち資料を集めてこられた<sup>43</sup>ようであるが、氏の扱った例では春秋中期（前六世紀前後）河南新鄭の鄭国大墓出土の鶴方壺の例が早いほうである。戦国時期になると草原地帯に近い三晋で製造したと推定されるデータが増加する。白狄のたてた河北の中山国では当然のように有翼獣が見られる。漢代になると巴蜀兵器上の紋様では有翼虎紋が流行した。“三叉格式銅劍”と石寨山M7号墓の銀帯釦の翼虎とを考慮して内蒙古西部より雲貴高原へ通じる南北道があったと想定している。漢代には有翼獣は圧倒的な数となり天禄とか辟邪とか麒麟とか名づけられている。錢樹座の神獣のほとんどに翼がつけられている。

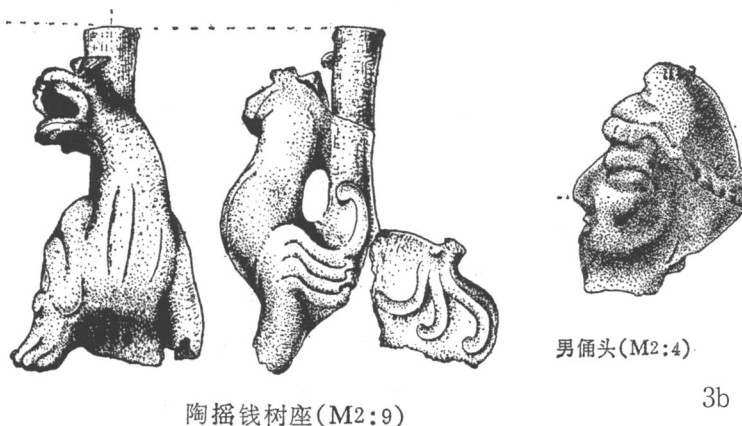
胡とは狭義ではイランを、広義では西域をさす。胡人とは西胡人（イラン人）、大食人（アラビア人）、波斯人（ペルシア人）、トルコ人、ウイグル人などをさす。<sup>44</sup> 考古遺物では遼寧省建平県牛河梁第1地点、新石器時代の紅山文化の女神廟から発見された老婆のような神像<sup>45</sup>は胡人ではないかと思っている。確実なのは周原から発見された2件の西周時代のどぶ貝製胡人の彫刻品<sup>46</sup>である。搖錢樹の樹頂に西王母にかわって仏が坐った時、先にあげた陝西域固の場合には右側に仏にむかって跪坐する尖頂帽をかぶった拱手して揖拝する人物、四川安県文管所蔵の錢樹の頂には左手をあげて施無畏印相を示す仏の左側に尖頂帽をかぶり蹲踞の姿勢をとるいずれの人物も胡人の供養者と考えられる。また額に仏にある「白毫」に類似するものをもつ陶俑が存在する。四川では重慶忠県塗井M5号崖墓<sup>47</sup>出土のものが見易い。これらの陶俑は湖北にも見られ武漢黃陵瀟

口墓<sup>48</sup>とか武昌蓮溪寺吳墓<sup>49</sup>でも見られる。ただ「白毫相」をもつ俑を胡人だと認める人はまだ少数派かも知れない。

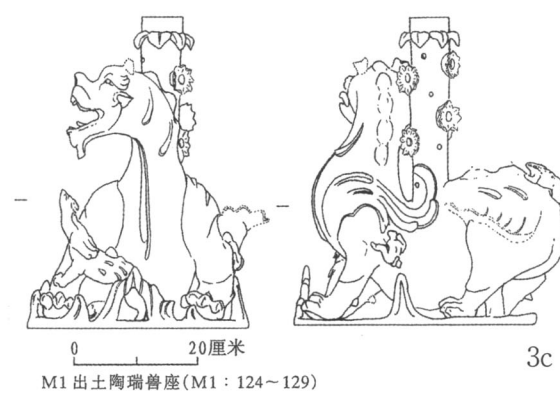
興味深いのは胡人の陶俑と辟邪というか獅子グリフィンではないかという錢樹座を伴っている例である。四川涪陵三堆子(図3b)<sup>50</sup>ではM2石室墓から灰陶で羊角帽をかぶり高鼻、眉梁が隆起し顴骨が突出、ひげの多い俑が出土しそれに伴い陶樹座が出土している。威嚇するように口を張り前肢についた翼を拡げる有翼獣—イラン系か獅子グリフィンといってもよいものである。同じ有翼獣の錢樹座と思えるものが湖北黄冈市対面墩M1号埽室墓(図3c)<sup>51</sup>からも出土している。陶質で獅子に似た瑞獣が四足で大地をつかみしめ奔騰するのをぐっところらせている。大きく口を開き歯が露わで舌がまき上る。短いあごひげ、獣身には羽翼が前足の上方についており今まさに拡げようとしている感じ。墓葬の年代は東漢晩期—東漢末年。



3a



3b



3c

- 3a 山東濟南大覺寺M2
- 3b 四川涪陵三堆子
- 3c 湖北黄冈対面墩

図3 グリフィンと胡人

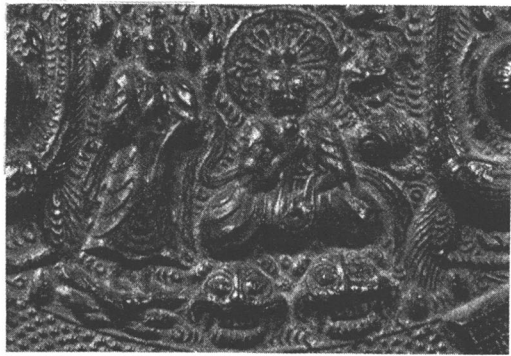
なお銭樹座ではなくて石硯ではあるが、獅子グリフィンと胡人の関係をもっと鮮明にするのが山東済南市長清区大覚寺村M2号塋室墓<sup>52</sup>より出土した石硯（図3 a）である。前中後室と前室左右に耳室をもつ。石硯は中室前方甬道近くで発見された。上下に合せる式で全体は猛獣が人を載せている形をとっている。長26.2、幅9.4、高24.5cm。獣は口を大きく張り口内には紅色の彩りが残る。領下にひげがあり全身が鱗で覆われ左右各両翅の膀に羽毛を刻画する。四肢の上に円泡の帯飾が締められている。首の背のがわに三角形の魚のひれ状のものがつく。林氏のいうギリシャ起源の獅子グリフィンに相当すると思う。背の上には盤がありその後左右に各2人ずつの人物が背中を向けあって坐る。左面の2人はあぐらを組んで坐り頭には小円帽をかぶりいずれも胡須がある。そのうちの1人はやせて長い頬、鼻は高く目は深い。又小帽をかぶる。獅子グリフィンが胡人を載せている状態のもので、ユーラシア大陸に広く拡がる獅子グリフィンと胡人の結びつきの強烈な印象が当時の中国人にとって如何に衝撃であったかをよく示している。先の銭樹座の有翼神獣と共通する飛翔、守護、威嚇など当時の人々の願望をこめた造形品といえよう。

M2号墓からは2具の人骨とその近くから大量の銅縷玉衣片が出土している。『後漢書』礼儀志下に『大貴人、長公主は銅縷玉衣を用いしめよ』と明確に規定されていた。銅縷玉衣は位を嗣ぐ侯あるいは諸侯王、列侯の妻にも用いられたと思える。M2号墓主の身分は東漢晩期の嗣侯で墓主の家族との合葬墓と思える。長清双乳山M1号墓は西漢濟北王墓でこのM2号墓も東漢時の濟北国に属している。山東に多い漢画像石に胡漢戦争などが表現されるのも無理はないぐらい胡人の流入はあり得たかも知れない。

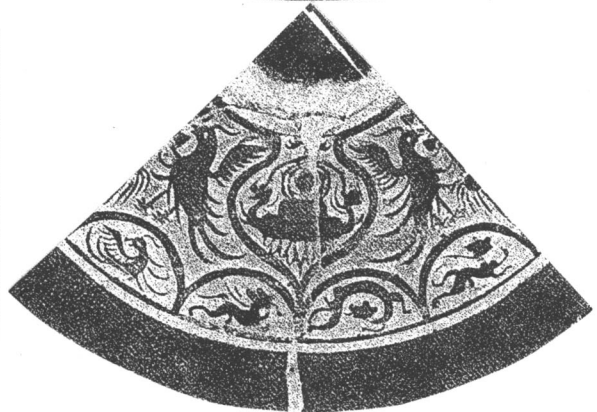
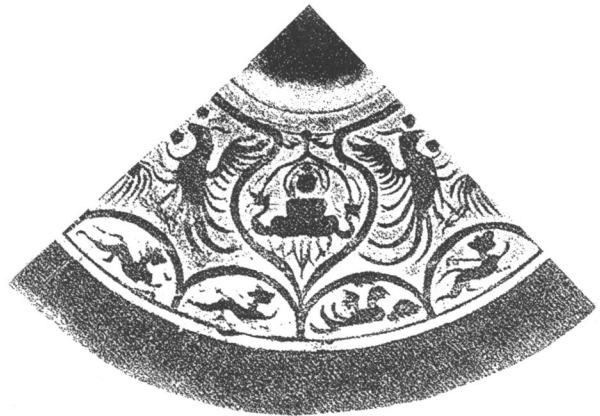
## 鏡と仏の像

兪偉超氏は『鄂城漢三国六朝銅鏡』が1986年3月文物出版社から刊行されるに際し1974年8月盤龍城の発掘に赴く前夕、鄂城県文化館でこれらの鏡をはじめて見たが今回多くの人々の努力で本書がなったことを喜びこの序を書いたとする。その中で仏像夔鳳鏡（変異柿蒂八鳳鏡）について触れた時、「銅鏡上に仏像を鑄ることは三国に起る。日本奈良新山古墳出土の1面の曹魏の三仏三獸鏡は神獸鏡中の神人を変えて仏像とした。変異柿蒂八鳳鏡中の仏獸鏡もそれと同じであるが明らかに両個の系統に分かれる。変異柿蒂八鳳鏡がどんな仏獸鏡になっているのか4面を見たが西晋時の仏教信仰は三国時代に比べて普遍的だといえよう。」と新山の鏡を曹魏の鏡と認識している。中国の研究者としては珍しい。

仏像夔鳳鏡は伝世の4面と王仲殊氏の集められた7面<sup>53</sup>と鄂城六朝墓<sup>54</sup>の報告中3面が知られた。飛天の有無を最初の目安にすると飛天のあるもの（I式）8面、飛天のないもの（II式）5面となる。金華の孔子達の弁内にあるものは除き、鄂城のM4037（図4 a）とM4009は王仲殊氏の報文と重なるものがある。I式の場合、鏡縁もしくは鏡縁内側の12ヶの連弧文中3ヶ所に飛天、四弁には仏像のない；16弧のうち2ヶ所に飛天、四弁に仏像なし；弁の相対する位置に飛天、残



4b 長野御猿堂画文帯仏獣鏡



4a 鄂城M4037 仏像夔鳳鏡

図4 湖北・湖南の仏

表1 夔鳳鏡と仏像

所蔵・出土地	飛天の有無	連弧数	連弧文内飛天数	四弁内の仏像	径cm	備考
ベルリン国立博物館	有	12	3	仏像なし	17.8	
江西省靖安県虎山	有	16	1	仏像なし	13.8	‘太康九年(288)校尉’墓出土
江蘇省南京西善橋	有	16	2	仏像なし	14.5	湖北鄂城西山呉墓鏡と同範という
湖北鄂城M4009	有	16	周圈帯中2	仏像なし	16.6	
浙江省武義県	有	16	1	1弁は不明 相対する2弁に飛天 1弁は三尊(中央坐仏、両側立像)	15.4	3C中期 三国時代呉墓
ハーバード大フォッグ美術館	有	16	2	1弁内 三尊(坐仏と両側に立像-脇侍)	14.6	脇侍は飛天の類か
ボストン美術館	有	16	2	1弁内 頭光をもった飛天(?)	14.2	
杭州市出土浙江省博物館	有	16	3	1弁内 仏像両像が並存、頭上に光背	11.6	
湖北省鄂城物資公司	無	12	0	1弁内 居士(?) 側身跏趺坐 高冠、長髯、定印	14.2	三国東呉武昌産
東京国立博物館	無	16	0	3弁内 仏龕内に坐仏 1弁内 三尊(半跏思惟、侍者、供養人)	14.3	
湖北鄂城五里墩M4037	無	16	0	3弁 仏龕内に坐仏 1弁 三尊(半跏思惟、侍者、供養人)	16.4	
湖南長沙在家塘	無	16	0	4弁すべて1組の三尊仏。相対向する弁内に龕内坐仏と両側立像。 他の対向は半跏思惟、侍者、供養人	16	呉の中後期作 3C中期
湖北鄂洲西晋墓	無	16	0	4弁内すべてに三尊像	18.5	鏡は三国東呉武昌産

りの良い弁内は三尊仏、中央に坐仏、両側に立像の脇侍、鏡縁に2ヶ所飛天；四弁の鈕座の1つに三尊仏、両側に立像脇侍といった少しの面数しかないのにバラエティーに富む。周縁に飛天のみられないタイプでは四弁のうち三弁は各弁内に1尊が龕内に坐し、残りの一弁は半跏思惟像で左には曲柄の傘をもつ侍者、右には跪坐する供養人の像が見られる。弁内に1人の三尊は過去・現在・未来仏を示しており、最後に弥勒仏という構成なのだろうか。王仲殊氏は湖南長沙のⅡ式の例中、弁内の脇侍に肩から羽毛が生えていて漢の画像石にみる羽人と判断し、道仏混糅の証拠とされている。仏像夔鳳鏡は面数が少ない割には文様のバラエティーに富む。逆にいうと安定していない。また出土状況も湖北鄂城出土の2面が墓からというだけでそれさえもよくわからない。ただ製作された時期が孫呉の中期を中心とし製作場所は孫呉の第二の首都武昌であったということは明らかといえる。筆者の注目する点は、以上のようなことも重要であるが、それ以上に弁内の一尊像にしても三尊像にしても、あるいは弁内の飛天や周縁連弧文帯中の飛天にしても、いずれをとっても一目で仏教に関係のある造像とわかることである。その造像は同時代の鏡の中では、



三角縁仏獣鏡を中国鏡と認めないのであれば、夔鳳鏡だけに限られていたことになる。少し製作時期はおくれるし、日本の古墳からしか出土していないが王仲殊氏も中国鏡と認めておられる画文帯仏獣鏡（図4b）<sup>55</sup>がわずかにその後を襲うだけである。

夔鳳鏡は樋口氏の解説<sup>56</sup>を参照すると元興元年（105A.D.）と永加（嘉）元年（145A.D.）の銘をもつものがあり東漢中期以后には確実に製作されていた。少ない例しか集めていないが、男女合葬あるいはどちらかの追葬の場合、鏡1面をそれぞれ副葬している場合、夔鳳鏡は女性に副葬されていることが多いように感じる。<sup>57</sup> 男性の場合は例えば甘肅武威雷台東漢墓からは金錯夔鳳鏡が出土しているがその傾向は曹魏の時代もつづく。なぜこんなことをいいたかといえ、仏像夔鳳鏡の中で先にもみたように飛天を図柄にいれる鏡の多いことは女性むきであることを示しているのではないかと思う。

しかし三国呉鏡の文様の中に仏の像はそれほど重要な位置を占めていない。これは何故か。

## 魂瓶と仏像

同じ仏像でも浙江・江蘇を中心とする堆塑罐（魂瓶という呼び名を使う）に貼りつけられた、あるいは作りつけられた仏像群が存在する。紀年をもつものが多く、先の南京博物院と龍谷大学の合同調査の報告図録を主とした資料として宿白氏は仏と胡人の関係を重視しつつその特徴を論じた。

氏の作成されたデータを要約すると胡人がまず魂瓶上に現われるのは呉太平二年（257A.D.）であり、坐仏が加わるのは呉天冊元年（275A.D.）である。それ以後東晋永昌元年（322A.D.）まで仏像と胡人はいずれかが欠ける場合もあるが基本的に魂瓶の上（頸の周り、頸の頂、腹部など）に表現されている。紀年のあるものでみると呉の元号の明かなもの天冊元年（図5c）～天紀元年（277A.D.）の間の5例に対し、西晋の元号あるものに伴うもの太康元年（280A.D.）（図5d）より永嘉七年（313A.D.）まで17例を数える。そして小南氏の段階では東晋代は皆無の状態であった<sup>58</sup>がその後1例発見されたのが永昌元年肖山で発見された青瓷五联罐である。また魂瓶に特徴的な本来蓋のあるべき場所に蓋板状の円盤の上に作りつけられた楼闕は呉永安三年（260A.D.）には闕があらわれ、呉天冊元年（275A.D.）には楼闕ともども出現し以降最後まで基本的にある。貼りつけられたり塑られた仏像はどんな様子かといえ、報告書にともなう写真や南京博物院の作成した図録ではとても細部を伺えないので、宿白氏の見解によると、「仏は多く双獅蓮座上に禪定の姿態で坐しており、先に論じた四川の施無畏像とは異なる。両者に共通するところは高肉髻、うなじからの円光背、結跏趺坐の姿と仏像と共存している深目高鼻あるいは尖帽をかぶっている胡人の存在である」という。いずれにしろ仏は仏としてすぐわかるということと判断する。

魂瓶に貼着された飾りの人物や神獣のうち仏と胡人との場合には胡人がまずあらわれる。楽舞百戯するものが多く、胡人は白毫相が多い。白毫相の俑は武昌永安2年墓（259A.D.）、馬鞍山呉

墓、長沙金盆嶺や黄坡呉晋墓から出土しており、高鼻巨目、着尖帽の跏坐俑、操作俑、庖厨俑、武士立俑、属吏俑はみな諸胡といえる。ただ宿白氏は錢樹が蜀漢の段階で亡びたのに対しこれらの五联罐は西晋の段階でかえって盛期を迎えるとして亡びた呉の影響を受けていないといふかしている。これについては小南氏の神亭壺は東呉の支配階層より先住の呉会の豪族の葬送儀礼用の道具として作られ用いられつづけたものであって、孫呉の支配階層にあつては無関心、無関係のものであったという意味の指摘<sup>59</sup>が正しいと思われる。

魂瓶は呉会の人士（呉郡と会稽郡の先住の豪族）の大事にしたもので南京と江寧のライン以東にしか基本的に出土しない（と小南氏はいわれるが江寧はもしかして浙江金華あたりのまちがいではないのか？）支配階層の孫呉の人々には魂瓶は関係ないとの見解である。孫呉の支配階層は孫策が弟の孫権に東呉で失敗してもその時は西の方へ帰れば良いからといったというエピソードや呉会の士との関係は張角の愛読したという‘太平清領書’の注に引く江表伝に「時に道士琅邪の干吉あり、先に東方に寓居せりしが、呉会に來たりて精舎を立て焼香して道書を読み符水を製作して以て病を療す。呉会の人多く之に事える。孫策かつて郡の城楼上に於いて賓客に会せんと請う。吉正装して小走りに門下を度る。諸將、賓客の三分の二は樓を下りて之を拜す。掌客者は訶を禁ずるも止むる能ず。策ただちに令じて之を収めしむ。諸事の者、悉く婦女をして入らしめ策の母に見え之を請う。母、策に謂いて曰く「干先生また軍を助け福を作す、將士を医護せり。之を殺す可からず。」策曰く「むかし南陽の張津、交州の刺史たり。前聖の典訓を舍き、漢家の法律を廢し、常に絳帟の頭を著し、鼓琴焚香、邪俗の道書を読み卒して蛮夷の殺すところたり。此れ甚だ無益、諸君はただ未だ悟らざるのみ。今この子すでに鬼録にあり、また紙筆を費す勿かれ。」すなわち催して之を斬り首を市に懸く。」（『後漢書』卷三十下襄楷伝）とあることだけで孫呉と呉会の士との関係や孫呉の道教に対する態度とか先にあげた孫皓の仏像に対するあり様から仏教に対する態度をとやかくいうのは問題ではあろうが、いずれにしろ道仏に対する姿勢は伺えよう。

孫堅は呉郡富春の生れだというのが、長江中流域に（荊州）その主体をもつ孫氏政権は複雑な社会構成の上に成り立っていたと思える。当時争乱に明け暮れる華北の地から長江を南へ渡って新天地を求める人士は跡をたたなかつた。東呉の名臣60人余のうち半数は北人だといわれたぐらい南渡した北人の勢力は大きかったと思われる。彼等は諸葛氏に代表される重臣群を構成していた。その下に荊州や武昌など長江中流域を中心とする地域出自の孫呉貴族階層や武士団など、その下に孫呉政権が首都をおこうとし、また置いた建業（南京）にほど近い呉郡や会稽郡を中心とする呉会の土豪達、それらのおそらく古くからつながりのあつた蜀地と長江中流域の事あるごとに往来のあつたルートを使ってやってきた胡人の群、先にものべたように諸葛亮は月支や康居の胡人の侯国と軍事同盟を結んで魏の司馬懿や曹真、曹爽と闘おうとした。胡人は相当数の人々が蜀地へ移り住んでいたのである。蜀の亡びる前后に彼等が長江中流域へさらに下流域へ自身の特

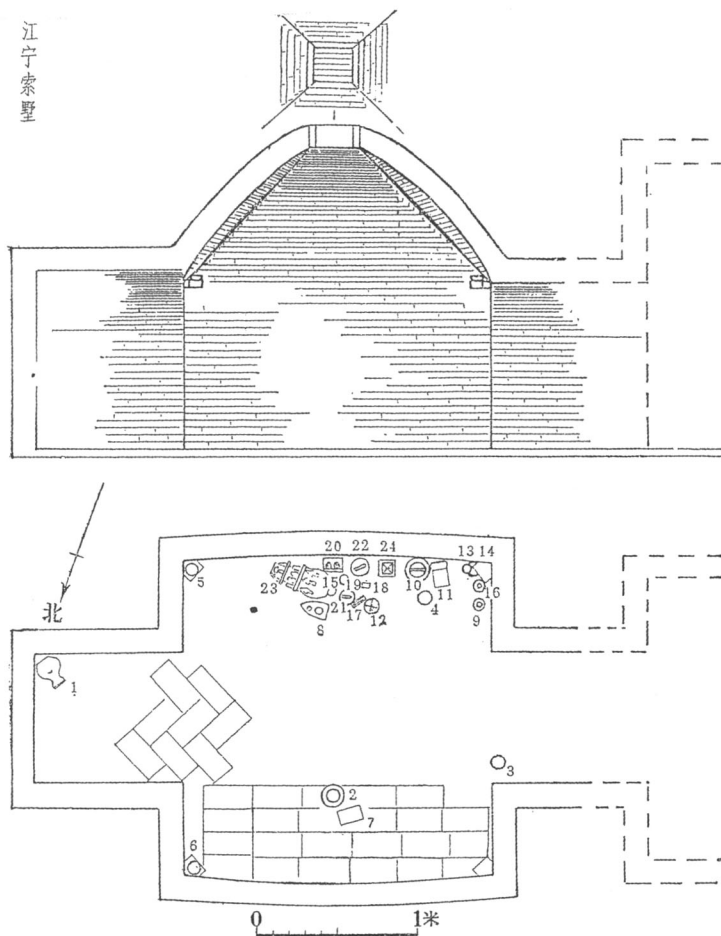


5a 陶五联罐 (幕府山M1出土)

5b 陶人物堆塑罐 (殷巷79M1出土)

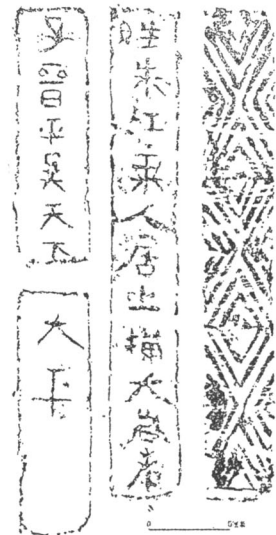


5c



图二 紫窑砖瓦厂一号墓平、剖面图

1. 瓷盘口壶 2. 瓷碗 3,4,5,6. 瓷盘 7. 长方形石板 8. 陶灶 9. 陶灶斗 10. 陶薰炉 11. 陶井  
12. 陶甗下扇 13,14. 陶臼 15. 陶筛 16. 陶埴器 17. 陶甗 18. 陶灶 19. 陶甗 20. 陶鸡舍  
21. 陶狗窝 22. 陶猪圈 23. 陶地灶 24. 陶堆塑罐顶盖和陶甗上扇、陶盘座



图六 墓砖铭文及纹饰拓本



1. 陶堆塑罐 (85JSM1)

5d

5a 南京幕府山M1 五鳳元年墓  
5b 江蘇江寧殷巷東吳墓

5c 江寧上坊天册元年墓  
5d 江蘇江寧太康元年墓

图五 江東の仏

技を生かして移り住まなかったとは考えにくい。そこでは各階層の人々に奉仕しながら彼らが西域さらにはその西方の出自の地からもち伝えた宗教—仏教とその習俗—を東呉の地で受け容れる人々へ流布したことは自然の成り行きであったろうと思える。考古遺物の示すところ東呉の支配階層たる孫氏政権は孫皓の道化ぶりにあるような態度ばかりであったときめつける気はないが、仏教に対する積極的な姿勢というのは孫権が赤烏四年（241A.D.）建業に建初寺を建てたとはいえ、あまり見てとれない。素直に受け入れたのが呉会の人士達であり、その産物の具体例として堆塑罐（神亭壺、魂瓶）に表わされた仏像群と思える。その最も根の深みには孫呉支配階層と呉会の人士の出自のちがいが、さらにいえば血脈のちがいに由来するのではなからうか。先に筆者は春秋中期～戦国期、華南の越系の人々の墓には棺の下や遺骸の下に円形や楕円形の穴を掘りその中に陶壺や罐を基本的に1個入れる風習について論じた。<sup>60</sup> いつの頃からか楚の国を中心として起こった考えに、人の死後の魂は魂気と魄気にわかれ、魂気は天へ魄気は形にそって地へという風に考えられていた。春秋期長江中流域の荊州を中心として勢力をはっていた楚は戦国期にかけて南進し華南の大動脈である湘江を利用して越の地へと侵入し、最終的には越国を亡ぼすまでになるが、両者の接触の間に文化的影響を相互に与えあうこともあったのではないかと考える。楚の魂魄の思想を受けついで越では腰坑ともいうべき棺の下の穴に壺を入れる—魄の宿りどころとするといった風習を生みだした。それが形をかえて復活したのが、東漢中頃からはじまる陶五联罐と考える。詳細に五联罐の貼飾や作りつけの構造物を検討する余裕がないので見通しをのべるにとどめるが、当初の状況は天門に代表されるような崑崙山への昇仙願望を表現していたものが、胡人のもたらした仏教の教えから須弥山へと変貌したのではないかと考えている。いずれにしろ孫呉支配階層が楚系の人で、呉会の人には越系の血脈が流れているのではないかと筆者は考えている。銭樹の風習が蜀漢の滅亡とともに途だえ、逆に魂瓶は西晋の代になって栄えたというのは、それぞれの習俗を担った人達の階層のちがいによる。蜀漢の滅亡のあと、蜀の大家・豪強は中原へ強制移住せしめられた。空白地帯となった蜀の地へは蒙文通<sup>61</sup>によれば、僚を中心とする漢人とは異なるいわゆる現今の少数民族—南夷がかわって占拠した。彼等には銭樹に伴う思想は考慮の外であったから銭樹の荷担者はいなくなった。それに対して魂瓶の場合は、東呉が亡び、孫氏一族を含む支配階層とそれを支える荊州孫呉貴族群は亡びても魂瓶の風習を守った呉会の人にはほとんど何の影響もなかったことがわかる。「大歳庚子晋が呉を平らげて天下太平」と埴銘にある〔江蘇省江寧県淳化郷索墅太康元年（280A.D.）墓〕<sup>62</sup>（図5 d）ように。むしろ呉会の人にとっては孫呉政権はいない方がよかったのだ。それが遺物の趨勢にも影を落としている。荊州を中心とする孫呉の本拠地で仏教関連のめぼしいものとしては銅鏡があるが、それが先にも見たように特定の鏡に限られた寥寥たるものであったことにその本質が伺える。それも多数種類のある中で夔鳳鏡だけが（そのあと少し遅れて画文帯仏獣鏡が）仏像を表現する対象の鏡として選ばれる。選ばれた夔鳳鏡は合葬墓の場合（追葬も含めて）女性の方に副えられていることが多い。注意し

ておきたいのは長江中下流域の鏡や魂瓶に表現される仏は当初から仏としての明確なイメージをもっている。そして上流の施無畏印とちがっていずれも禪定印の結跏趺坐像か半跏思惟像であることである。

### 三角縁神獸鏡の仏像

三角縁神獸鏡のうち仏像表現されているもの<sup>63</sup>は道仏混糅の度合いからいうと

1 百々池古墳と椿井大塚山（M24号鏡）（図6）から出土した二神二獸鏡が最も早い。西王母の頭の後に列点で円光背をつけただけで道教の神仙像のイメージが圧倒的に強い段階。龍の前に餌をやる<sup>かん</sup>豢龍子の存在にも注意。



図6 京都椿井大塚山古墳

2 群馬県赤城塚出土四神四獸鏡（単像式）（図7b）四区画の一つに画文帯環状乳神獸鏡や同向式神獸鏡に多く見受ける<sup>〰</sup>形の台座に坐す三珠冠をかぶった東王父と獸の背中ごし遠く小さく見える城壁か崑崙山の表現かの

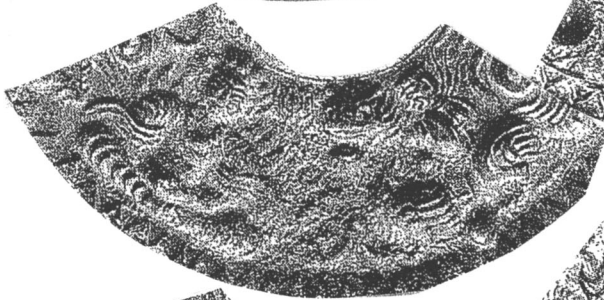
上に坐す西王母の道教の神仙そのままの登場と他の三区画は仏像の出現。神仙区画の右（半時計まわり）区画には、冠か高髻の類か上半身裸体で首飾りをつけショールを脇から膝にながし結跏趺坐し禪定印を組む。両肩から三角形にとがる火焰光背が認められる。進賢冠か冠をかぶった羽人の騎った神獸の口が仏の顔にせまる。次の区画の仏像も同じ形、神獸は巨を噛む。次の区画は巻き毛風の頭、通肩衣をまといたくましい裸足を踏みしめた菩薩か右手は胸前で施無畏の印相を示し左手は高くあげて蓮華の蒼を寄ってくる神獸に食べさせるかのようなようである。菩薩と獸の間の足もとには蓮華の蒼がなお落ちている。神獸は尾をまきつけて旄をかざしている。菩薩は1の段階の豢龍子の変化したものとも見受けられる。この段階、道教の神仙も登場しているが4区画のうちの1区画を占めるにとどまり、残りの3区画は仏教の仏や菩薩の像が主流となっている状況を示しているといえる。

3 岡山市一宮天神山1号墳出土三神三獸鏡（図7c）仏の尊像の形はほぼ2と同じ。うち1尊だけ幘に似た冠か。いずれも尊像の左肩上に蓮華の蒼がある。それに向って駆けてくるかのような神獸に騎る羽人が各仏に向かっている。

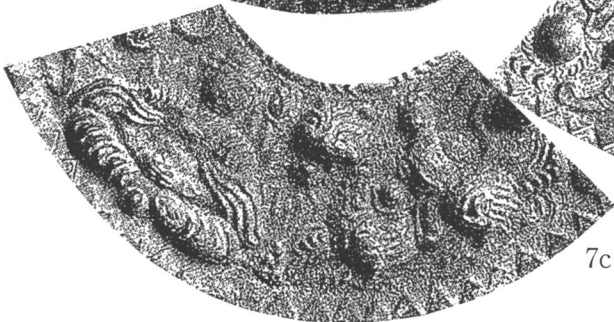
4 奈良新山古墳出土三仏三獸鏡（図8a）つぎの5のモデルになったかと思える鏡。高髻で円光背の頭光をもつ一尊は両乳をあらわし結跏趺坐して蓮華座に禪定印を結ぶ。両肩の上にも三朵の蓮華の蒼が表わされている。この仏は温玉成によると<sup>64</sup>現世仏。乳で六区に区画され半時計まわりに仏と交互に配された神獸の前には茎の長い蓮華の蒼が見られる。神獸の上に乗る羽人の姿はない。後の二尊は蓮華座に結跏趺坐して禪定印を組んでいるが、頭光背をもたず首のあたりから神仙と同じように羽や雲気をただよわせている。温玉成によると仏の左肩の上に鳥のみえる仏



7a



7b



7c

7a フォッグ美術館 金銅小仏像

7b 群馬赤城塚

7c 岡山天神山M1

図7 火焰光背をもつ三角縁仏獣鏡

は未来仏=弥勒。鳥も蓮華もない仏は過去仏だと。完全にはこの段階でも仏像化しているとはいえない。

5 寺戸大塚後円主体部出土鏡(図8b)、百々池古墳出土鏡、園部垣内古墳出土鏡と同範の三仏三獣鏡で铸あがり良くない。いづれの像も胸乳がもりあがっているので上半身裸体か。二尊は三山冠をかぶり一尊は幟風の冠をかぶる。蓮華座の上に結跏趺坐し禅定印を組む。幟かといったものをかぶった仏へ向かう神獣の上だけ羽人が騎乗している。蓮華座は水中にあるのか魚が寄ってくる。

三角縁神獣鏡の仏像の特色は夔鳳鏡や画文帯仏獣鏡にみられる仏像のように誰が見ても一目で仏さまだとわかる形をなかなか示さない点にあると考える。中国における初期の仏教遺跡や遺物を論ずる時、兪偉超のように和林格爾や沂南画像石墓、孔望山摩崖像をとりあげる人もいるが、



8a 奈良新山古墳

8b 京都寺戸大塚古墳

図8 三角縁仏獣鏡

資料として問題ありと無視する人もいる。三角縁仏獣鏡の場合はその判断が中国や韓国の研究者では特に厳しい。宿白氏は長江流域（上流では四川の銭樹、中流と下流の魂瓶）をとりあげ四川の施無畏印と衣の裾をつまみあげる説法図像と中・下流の結跏趺坐、禪定印とを対比させた。韓国の李正暎氏も銭樹、夔鳳鏡、魂瓶、黄河流域では沂南、孔望山をとりあげ施無畏を示す説法図像と結跏趺坐、定印とのちがいをとりあげて論じている。しかしいずれの場合でも三角縁神獣鏡はとりあげない。中国から一面も出土していないので中国への仏教東伝の関係品とはしないのは当然かも知れぬが、もう少し広い目で見られぬものだろうか。読んだ範囲では兪偉超氏だけが三角縁仏獣鏡を曹魏の鏡と認める発言をしている。王仲殊先生の見解が強く中国や韓国の研究者を規制して、頭から研究対象とすることをさまたげているのではなかろうかと悪気はなく思う。例え仮に呉の工人が海東の絶地へ亡命してきて作ったものであってもそこにも仏の像のえがかれた立派な古鏡があり、しかも神獣鏡の中には魏の紀年をもつもの、多数の銘を含むものがある資料を自国以外のところの出土品だからといって無視するのはどう考えてもおかしい。さしあたって資料のうちに加えてそれがどういう位置づけになるか一度は考えておいても悪くはないと思う。では三角縁仏獣鏡を資料として加えた時、何が変り、何がわかるだろうか。

宿白氏は四川の仏と長江中下流域の初期の仏像はすべて結跏趺坐像であるが、表している姿態は異なるという。四川の坐仏は施無畏印をなし説法論道で衆生に安楽と無畏を施与する動的形象である。一方長江中下流域の坐仏は定印をなし自身禪定の静的形象だと。いずれも中国初期の金銅像に類似するものがある。四川のとは藤木正一氏旧蔵仏像が、後者は河北石家庄あるいは陝西西安出土（3C末～4C初）現蔵ハーバード大学フォッグ美術館（水野清一のところではニューヨークのウインスロプ氏蔵品）（3C—松原三郎）のもので、いずれの仏像も明瞭に胡人の特徴を備えている。当時中国に入居していた胡人の礼奉した像と思える。ただこれらの仏像と四川や長江中下流域の仏像にどのような関係があったかは不明であり今後の課題という。宿白氏は問題を長江流域だけに限り、しかも鏡の仏像については言及しなかった。フォッグ美術館の金銅像との関係も禪定印を結んでいるという点の類似について触れたにすぎない。長江流域だけでなく、広く黄河流域をも含めて考えればどうなるか。李正暎氏は除いているが、私は和林格爾の壁画墓を兪偉超氏の記述に従ってとりあげる。中国へ、東方へというべきか初期仏教が伝えられた時、まだ仏を人の形をとって表現することのタブーであった時代と意識を反映している最も早い段階の表現方法であったと認識する。それらを中国へもちこんだのは兪偉超が孔望山摩崖像調査の際に指摘し、その後四川のことだけではあるが呉焯が強調し宿白もその見解を受け入れた仏の像と胡人の関係であろう。

## 鏡は魏鏡か

では三角縁仏獣鏡の文様の分析結果はどうか。道仏混糅から仏教の優勢への変化という目でみ



ると、五種8面の鏡は①百々池の二神二獸鏡②群馬天神山の四神四獸鏡（単像式）③岡山一の宮の三神三獸鏡④奈良新山の獸文帯三仏三獸鏡⑤京都寺戸大塚の三仏三獸鏡となる。①では西王母に円光背を加えたのみ。②では三仏はそれぞれ火焰光背を負い結跏趺坐した二尊と、右手施無畏印、左手は蓮華の苔みを寄ってくる神獸に与える菩薩か仏、一区画のみ東王公と崑崙山上かに坐す西王母という道教の神格がそのまま残っている段階、③では先の菩薩にかわって蓮華座に結跏趺坐し三角形に鋭く尖る火焰光背（樋口は火焰文）を負った仏三尊。東王公、西王母はいなくなる。④蓮華座に結跏趺坐し、一尊は円光背を負う。楊玉成によれば仏の左肩上ちかくに鳥のいるのは未来仏、両肩上に蓮華があり、頭光をもつのは現世仏、残る一尊は過去仏で時計廻りに表現されているという（反時計廻りだけど。それとより鮮明な写真でみる<sup>65</sup>と、この仏の右肩上方にも向ってくる鳥がみえるがほんとに過去仏でよいのか）。三世仏を表現しているのだと。⑤は④の外区獸文帯を省略、一尊の円光背もない。

以上の変化をみると、まず当初から誰がみても仏という形で出現した長江流域の搖錢樹、夔鳳鏡、画文帯仏獸鏡、魂瓶に表現された仏像とは①の段階をもつことより異なるといえる。しかも②の段階で仏像自身も禪定印を組む尊像と施無畏印を示す菩薩像の共存がみられ、これは宿白が指摘した四川は施無畏印の動的說法像、両湖と江浙では禪定印をくむ静觀像のちがいがあると強調されたのとはちがうけど何故かという疑問が生じる。李正曉は四川が早く魯南蘇北への仏教の伝来をその次に、四川からの影響と考えているようだがこれは苦しい。仏画であるかも知れないが、蘇北には楚王英の早くに灌仏がありまた桓靈の間の天竺僧らの渡来もあったからである。しかし火焰光背で禪定印という鏡②、③の段階は施無畏印が沂南の八角擎天柱南面上から三段目の像で理解でき、蓮華をささげる図柄が孔望山摩崖像の4組X65番の胡人像で理解できるとしても例がない。はたと困っていたが、水野氏の本を繰るとそのものずばり金銅小像の中にこれこそ手本という仏の像があった。水野氏の当時はアメリカ、ニューヨークのウインスロブ蔵（現アメリカ、ハーバード、フォッグ美術館蔵）の全高23.7cmの金銅坐像（図7 a）<sup>66</sup>である。石家荘方面（後趙石勒の勢力圏内）の出土かという。水野氏の解説文をひく。「刻銘はない。方趺はひくく左右に獅子、まん中に瓶中の供養花がある。これも中国にめずらしいガンダーラ風である。左右側面にまわって比丘形の供養者が燃灯をもち蓮枝をもって立っている。禪定の手印であるが大きな指がこまかく写実風にあらわされている。からだも全身通肩の衣におおわれながら、むね、はらのふくらみは自然で……」とある。肝腎の三角形に尖がる火焰光背の説明がないが、結跏趺坐、火焰光背、禪定印と蓮華をもった供養者という構成は②と③のものにぴったりである。まるで金銅小像と供養者を展開図にしたのが鏡の文様となる。水野氏はこの金銅小像について300年代初頭、あるいはそれよりいくらかさかのぼった200年代のものと思うとした。三国魏の曹操の兄の子、曹真は先にも触れたが太和三年（229A.D.）の大月氏波朝の曹魏への入朝に功があったといわれる。クシャーン朝ペルシアの時代にガンダーラ美術は興起し栄えた。これと同じような時期といえる

金銅小仏像がこの時中国へもたらされた可能性は高い。

早くに仏像を尊崇した東漢の光武帝の息楚王英は現在の徐州に近いところに楚国の領地を下賜された。徐州の西およそ130kmほどの譙（現安徽亳県）で生れた曹操は東漢靈帝中平元年（184A.D.）河北鉅鹿に端を發した黄巾の乱に乗じて、漢の支配の衰えた時をチャンスと一族を糾合し戦に身を投じた。琅邪出身の干吉が東海（徐州から東180km）に近い曲陽泉で初期道教の聖書「太平清領書」170巻を泉から拾いあげそれを愛読したのが張角（太平道の創始者で自称黄天泰平と名のり黄巾の乱の首謀者）であったことも先に触れた。乱は「十余年間、衆徒数十万人、郡国連結し青、徐、幽、冀、荆、揚、兗、豫八州の人ことごとく呼応せざるなし」といわれる。初平3年（192A.D.）青州の黄巾の乱を平定した曹操は降卒30余万といううちの精兵を配下にし青州兵と號さしめた。『三国志』魏書武帝紀によれば興平元年（194A.D.）本来、穀一斗50～60銭が一斛50万銭にもつき人は相喰むという惨たる状況にあった。当時徐州の刺史だった陶謙（『後漢書』卷七十三劉虞、公孫贊、陶謙列伝第六十三）のもとに同郷ということで聚とともに身を寄せていた笮融は広陵、下邳、彭城の水運の監督者に任じられたのを機会に何と思ったか莫大な金を自分のものにし浮図寺を建て、層塔を中心にして廻廊をめぐるせた。三千余人をいれられたという。「銅をもって人をつくり、黄金もて身に塗り、衣するに錦采をもってす」とある。集るもの万余人と文献は記す。陶謙の部將と兵の一部が財をねらって操の父嵩を殺したというのは余談としても蘇北魯南の道教、仏教思想は何重にも折り重なり複雑な様相を呈している。その結果の一部のあらわれが、沂南画像石墓や孔望山摩崖像に表現されているものであろう。三角縁神獸鏡の銘の中には「銅出徐州、師出洛陽」という言葉が明示されている。三角縁仏獸鏡背文の分析に伺える道仏混糅から仏像優先への変化は例えば火焰光背をもつ小金銅像を目にし手にとるといった経験を有していないと他の地域では鑄造工人がアイデアをふりしほってもむつかしいと判断されよう。三角縁仏獸鏡の鏡背面文様として鑄出された仏像は以上に述べたような徐州を中心とする蘇北魯南の歴史を背景に生みだされたものと私は考える。仏像鏡は何も呉だけで作られたものでもなく、また他の地で作られた可能性を否定するものでもない。

(2013年1月9日稿了)

(2013年1月26日完)

## 注

- 1 近藤喬一「寺戸大塚古墳後円部主体の調査」『史林』第54巻第6号、1971
- 2 水野清一『中国の仏教美術』平凡社、1968
- 3 小野山節「三角縁神獸鏡の傘松形に節・塔二つの系譜」『郵政考古』第36冊、1999
- 4 a 俞偉超「東漢仏教図像考」『文物』1980-5
- 4 b 内蒙古自治区博物館文物工作隊『和林格爾漢墓壁画』文物出版社、1978

- 4 c 連雲港市博物館「連雲港市孔望山摩崖造像調査報告」『文物』1981-7
- 4 d 俞偉超・信立祥「孔望山摩崖造像的年代考察」『文物』1981-7
- 5 陳永志ほか『和林格爾漢墓壁画孝子伝図輯録』文物出版社、2009
- 6 曾昭燭ほか『沂南古画像石墓発掘報告』文化部文物管理局出版、1956
- 7 李正曉「中国内地漢晋時期仏教図像考析」『考古学報』2005-4
- 8 林巳奈夫『漢代の神神』臨川書店、1992
- 9 李前掲注7
- 10 温玉成「“早期仏教初伝中国南方之路”質疑」『四川文物』2002-2
- 11 土居淑子『古代中国の画象石』同朋社、1986
- 12 水野前掲注2  
僧佑『出三蔵記集』卷一三、康僧会伝
- 13 大室幹雄『桃源の夢想』三省堂、1984  
大室幹雄『干渴幻想』三省堂、1992
- 14 宿白「四川錢樹和長江中下游部分器物上の仏像」『文物』2004-10
- 15 南京博物院・龍谷大学『仏教初伝南方之路文物図録』文物出版社、1993
- 16 呉焯「四川早期仏教遺物及其年代与伝播途径的考察」『文物』1992-11
- 17 羅二虎「四川崖墓的初步研究」『考古学報』1988-2
- 18 宿白前掲注14及び何志国注19
- 19 何志国「論搖錢樹与多枝灯的關係」『考古』2010-1
- 20 内江市文管所・簡陽県文化館「四川簡陽県鬼頭山東漢崖墓」『文物』1991-3
- 21 Susan N. Erickson, “Money Trees of the Eastern Han Dynasty”, BMFEA, No.66, Stockholm, 1994, PP. 5-115.
- 22 寧夏文物考古研究所ほか「寧夏固原市北塬東漢墓」『考古』2008-12
- 23 四川省文物管理委員會・涪陵地区文化局「四川涪陵三堆子東漢墓」『文物資料叢刊』10, 1987
- 24 湖北省文物考古研究所ほか「湖北黄冈市対面墩東漢墓地発掘簡報」『考古』2012-3
- 25 近藤喬一「三国両晋の墓制と鏡」『アジアの歴史と文化』第7輯、山口大学アジア歴史・文化研究会、2003.3
- 26 劉世旭「四川西昌高草出土漢代“搖錢樹”殘片」『考古』1987-3
- 27 何志国前掲注19
- 28 何志国「四川綿陽何家山2号東漢崖墓清理簡報」『文物』1991-3
- 29 涼山州博物館「四川涼山西昌發現東漢、蜀漢墓」『考古』1990-5
- 30 林巳奈夫『中国古玉の研究』吉川弘文館、1991
- 31 何志国「四川綿陽何家山2号東漢崖墓清理簡報」『文物』1991-3

- 32 四川省博物館・宜賓市文管所「宜賓市山谷祠漢代崖墓清理簡報」『文物資料叢刊』9-1985
- 33 何志国「四川綿陽河辺東漢崖墓」『考古』1988-3
- 34 羅二虎「陝西城固出土的錢樹仏像及其与四川地区的關係」『文物』1998-12
- 35 何志国・劉佑新・謝明剛「四川安県文管所収蔵的東漢仏像搖錢樹」『文物』2002-6
- 36 羅二虎前掲注34
- 37 南京博物院『四川彭山漢代崖墓』文物出版社、1991
- 38 何志国「四川綿陽何家山1号東漢崖墓清理簡報」『文物』1991-3
- 38' 森下章司「三段式神仙鏡の新解釈」『古文化談叢』第66集、2011 榎山満照「後漢時代四川地域における“聖人”図像の表現」『美術史』第163冊、2007
- 39 林巳奈夫『中国古代の神がみ』吉川弘文館、2002
- 40 入澤 崇「搖錢樹仏像考」『密教図像』第12号、1993
- 41 林 俊雄「東アジアのグリフィン」『シルクロード研究』創刊号、1998、3
- 42 孫華「三星堆出土爬龍銅柱首考」『文物』2011-7
- 43 李零『入山与出塞』文物出版社、2004
- 44 大室幹雄前掲注13
- 45 神奈川県立博物館『中国・遼寧省文物展』図録、1988。近野正幸様からいただいた。御礼申し上げます。
- 46 陳全方『周原与周文化』上海人民出版社、1988
- 47 四川省文物管理委員会「四川忠県塗井蜀漢崖墓」『文物』1985-7
- 48 武漢市博物館「武漢黄陂灑口古墓清理簡報」『文物』1991-6
- 49 蔣贊初「長江中游六朝墓葬的分期和断代」『中国考古学会第三次年会論文集』文物出版社、1981
- 50 四川省文物管理委員会ほか「四川涪陵三堆子東漢墓」『文物資料叢刊』10、1987
- 51 湖北省文物考古研究所・黄冈市博物館ほか「湖北黄冈市対面墩東漢墓地発掘簡報」『考古』2012-3
- 52 済南市考古研究所「済南市長清区大覚寺村一、二号漢墓清理簡報」『考古』2004-8
- 53 王仲殊「呉・晋時期の仏像夔鳳鏡について」夏鼐先生の考古生活五十周年を記念して。西嶋ほか『三角縁神獣鏡』学生社、1992
- 54 南京大学歴史專業・湖北省文物考古研究所ほか『鄂城六朝墓』科学出版社、2007
- 55 王仲殊「日本の三角縁仏獣鏡について」西嶋定男監修、尾形勇・杉本憲司訳『三角縁神獣鏡』学生社、1992
- 56 樋口隆康『古鏡』新潮社、1979
- 57 例えば江蘇省揚州市胥歩の塚室墓M70・M93・M89など。近藤注62

- 58 小南一郎「神亭壺と東呉の文化」『東方学報』京都第65冊、1993.3
- 59 小南一郎注58に同じ
- 60 近藤喬一「釜を被ったシャーマン」『アジアの歴史と文化』第15輯、山口大学アジア歴史・文化研究会、2011.3
- 61 蒙文通「漢・唐間蜀境之民族移徙与戸口升降」『南方民族考古』第3輯、1990
- 62 近藤喬一「西晋の鏡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集、1993
- 63 樋口隆康『古鏡』・『古鏡図録』新潮社、1979  
樋口隆康『三角縁神獸鏡綜鑑』新潮社、1992
- 64 温玉成前掲注10
- 65 水野清一前掲注2挿図1
- 66 水野清一前掲注2図版6

#### 図出典

- 1 a 曾昭燏ほか『沂南古画像石墓発掘報告』文化部文物管理局出版、1956
- 1 b 連雲港市博物館「連雲港市孔望山摩崖造像調査報告」『文物』1981-7
- 2 a 四川樂山麻浩崖墓の仏像。2000年7月30日筆者撮影
- 2 b 劉世旭「四川西昌高草出土漢代“搖錢樹”残片」『考古』1987-3
- 2 c 羅二虎「陝西城固出土的錢樹仏像及其与四川地区的關係」『文物』1998-12
- 2 d 何志国「四川綿陽何家山1号東漢崖墓清理簡報」『文物』1991-3
- 2 e 南京博物院『四川彭山漢代崖墓』文物出版社、1991
- 3 a 濟南市考古研究所「濟南市長清区大覚寺村一、二号漢墓清理簡報」『考古』2004-8
- 3 b 四川省文物管理委員会ほか「四川涪陵三堆子東漢墓」『文物資料叢刊』10、1987
- 3 c 湖北省文物考古研究所ほか「湖北黄冈市対面墩東漢墓地発掘簡報」『考古』2012-3
- 4 a 湖北省博物館・鄂州市博物館『鄂城漢三国六朝銅鏡』文物出版社、1986
- 4 b 樋口隆康『古鏡』・『古鏡図録』新潮社、1979
- 5 a - c 南京市博物館「南京郊県四座呉墓発掘簡報」『文物資料叢刊』8-1983
- 5 d 南京市博物院「南京獅子山、江寧索墅西晋墓」『考古』1987-7
- 6 樋口隆康前掲注4b
- 7 a 水野清一『中国の仏教美術』平凡社、1968
- 7 b 樋口隆康『三角縁神獸鏡綜鑑』新潮社、1992
- 7 c 樋口7 bに同じ
- 8 a 樋口4 bに同じ
- 8 b 樋口7 bに同じ

補記 山口大学図書館のホームページからYUNOCAというのを選びコンドウタカイチ(キョウイチでも?)でこれまで『アジアの歴史と文化』に発表した拙論が読めるという仕組みになっているそうです。これまでのをあげさせていただきます。

- ① 「商代宝貝の研究」『アジアの歴史と文化』第2輯、山口大学アジア歴史・文化研究会、1995年10月、pp.1～55
- ② 「商代宝貝的研究」(上海復旦大学・戴曉美訳)中国社会科学院考古研究所編『中国商文化国際学術討論会論文集』中国大百科全書出版社、1998. pp.389～412
- ③ 「西周時代宝貝の研究」『アジアの歴史と文化』第3輯、1999年10月、pp.1～40
- ④ 「西周時代宝貝の研究」図版編『西周墓出土副葬品一覽』—燕国・魯国・晋国—、図版pp.1～36(協力者、多賀まゆみ)
- ⑤ 「西周海貝之研究」(北九州大学・一木達彦訳)『三代文明研究』(一)1998年河北邢台中国商周文明国際学術研討会論文集、科学出版社、1999、pp.412～416
- ⑥ 「三国兩晋の墓制と鏡」『アジアの歴史と文化』第7輯、2003年3月、pp.1～47
- ⑦ 「中国古代に於ける鏡の副葬」—漆面罩を中心にして—『アジアの歴史と文化』第8輯、2004年3月、pp.1～22
- ⑧ 「关于遮盖死者臉面的习俗」(中国社会科学院歴史研究所・王震中訳)『中国文物報』2004年9月10日
- ⑨ 「獅子山楚王陵出土黄金飾貝帯をめぐって」『アジアの歴史と文化』第9輯、2005年3月、pp.1～37
- ⑩ 「九鼎と金人」—中国古代王権のシンボル—『アジアの歴史と文化』第10輯、2006年3月、pp.1～31
- ⑪ 「鄭州商代銅器窖藏考」—中国古代の銅器窖藏1—『アジアの歴史と文化』第11輯、2007年3月、pp.1～28
- ⑫ 「周原銅器窖藏考」—中国古代の銅器窖藏2—『アジアの歴史と文化』第12輯、2008年3月、pp.1～49
- ⑬ 「釜を被ったシャーマン」『アジアの歴史と文化』第15輯、2011年3月、pp.1～32
- ⑭ 「京都寺戸大塚出土の三角縁仏獣鏡」—道仏混糅の痕跡を追う—『アジアの歴史と文化』第17輯、2013年3月、pp.1～30

追記 退官後10年がまもなくたつ。結婚した年の夏に発掘したまま気にかけていた寺戸の仏獣鏡について、ようやく自分の見解をだすことができ少しほっとしている。なお私事ですが、長年の苦勞を辛抱してくれた妻・千鶴に感謝する。

(山口大学名誉教授)